

“ポスト 420 時間時代” の日本語教師養成

—大学生レポートが示唆する課題—

佐々木倫子・桜美林大学

msasaki@obirin.ac.jp

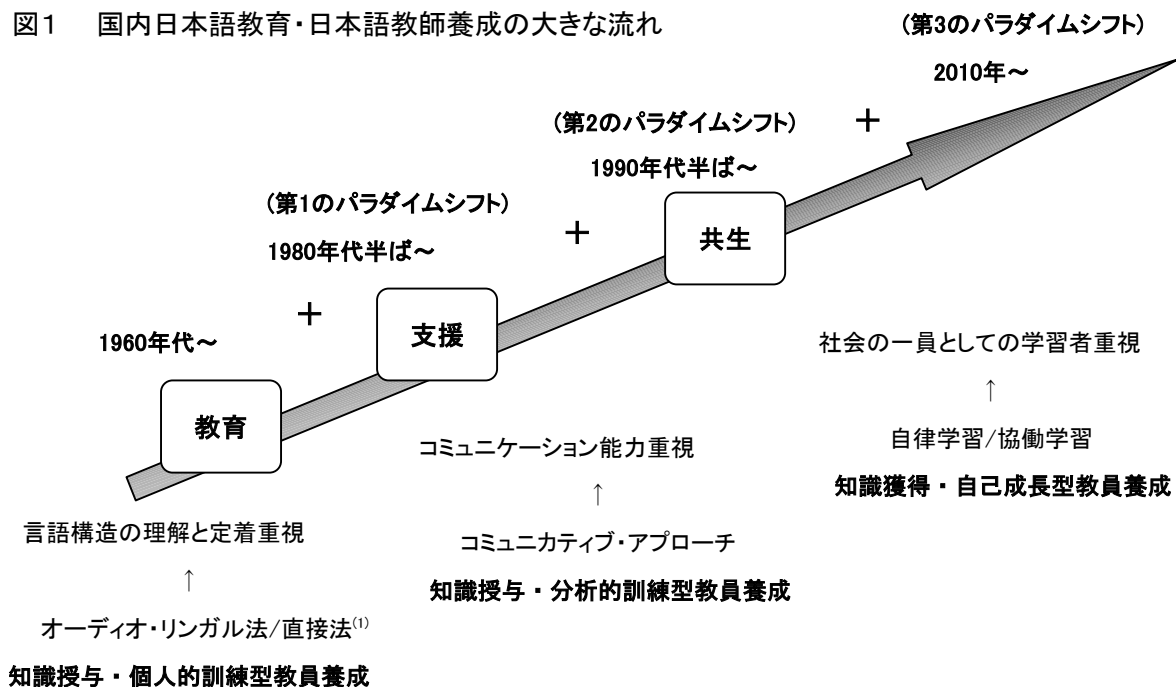
1. 社会の変化と日本語教師養成の変革

社会の動きは日本語教育の分野に教育の枠組みの変化（以下「パラダイムシフト」）をもたらしてきた。拙論では現在の国内における日本語教師養成の流れがどのように生まれてきたかを概観した上で、今後求められる方向性を、大学生の小レポートから探りたい。

1.1 第一のパラダイムシフト

現在につながる日本語教師養成を考えたとき、まず 1962 年の外国人のための日本語教育学会設立が挙げられる。その後 1980 年代半ばまでは、日本語教育界が教師の専門性の確立に努めた時期である。その「専門性」が意味したところは、日本語の構造に関する知識と教授法の知識・技術だった。しかし、1980 年代のグローバリゼーションの波を受けた日本語教育の現場は、言語構造の効率的・体系的定着教育からコミュニケーション重視の教育へと動き始めた。さらに、1970 年代にヨーロッパ諸国からのコミュニケーション重視の教授法への変革（Richards & Rodgers:2001、佐々木:2006）が、日本国内に波及し、従来型の日本語の「教育」に加えて、外国人住民による日本語学習の「支援」のための多くの教室が生まれた。

図1 国内日本語教育・日本語教師養成の大きな流れ



つまり、社会の変化は日本語教育の現場に変革を引き起こし、それはさらに日本語教師養成の変革を引き起こした。教師養成では、以下に象徴される、第1のパラダイムシフトが起きたのである。

- ・1985年「日本語教師養成等について」（文部省）

大学の主専攻45単位、副専攻26単位が定められ、一般の日本語教師養成機関においては420時間が相当するとされ、実習は今後の課題とされた。

- ・1987年 日本語教育能力検定試験実施

日本語教育に関する知識を短い時間で断片的に問う点、記述形式による知識を問うもので、実践力は課題となった。

しかし、上記は(財)日本語教育振興協会が日本語教育施設の認定を行う際の教師の資格としても重視されることとなり、教師の専門性の目安として知られるようになった。

日本語教師養成全般を見ると、第1のパラダイムシフトを経ても専門的基礎知識が求められ、知識重視型が主流である点は変わっていない。しかし、実習において、授業名人の技術を盗むような、個人的訓練型の養成ではなく、ある視点をもって授業分析をしていくという分析的訓練型の養成が始まったことは確かである。

1.2 第二のパラダイムシフト

グローバリゼーションはさらに加速化し、1985年の「プラザ合意」後の急激な円高はバブル経済を引き起こし、それに伴う外国人就労者の移入、技能実習制度の拡大や、1980年代後半の農家の後継ぎの国際結婚の増加などが引き起こされた。そして、多種多様な外国人の来日と定住傾向(依光ほか)、が強まり、日本語教育の現場では「コミュニケーション重視」から「多様性の認識・個別性の認識」が求められ始める。1990年代の国内の動きを述べる時、まず挙げられるのが、1990年の「出入国管理及び難民認定法」改正施行であろう。中南米日系人が多く来日し、さらに、中南米に限らず、日本に定住化する外国人が増加する。日本社会は多言語・多文化化に向け動き出し、それは第2のパラダイムシフトにつながっていく。日本人が外国人を「支援」するのではなく、共に新しい地域を築くという「共生」が時代のキーワードとなった。

マジョリティ（“日本人”）の子どもたちに対する教育においても、同質志向や横並び意識、過度に年齢にとらわれた価値観などからの変革を図り、個を確立していくことが求められた。（教育中央教育審議会：1997、佐々木：2006）これは日本語教育の世界が、主体的学習者から出発する、自律学習/協働学習を重視し始めた時期と呼応している。その後も教育は常に揺らいでいるが、社会の情報化・国際化に疑問がはさまれることはない。第2のパラダイムシフトは、マジョリティ側にも変化を求めたわけである。

これらの流れを受けて2000年に文化庁から示されたのが『日本語教育のための教師養成について』（別紙1）である。表に示された教育内容は、「コミュニケーション」を核として、「社会・文化・地域に関わる領域」「教育に関わる領域」「言語に関わる領域」の3領域が緩やかな関係で位置し、さらに「社会・文化・地域」「言語と社会」「言語と心理」「言語と教育」「言語」の5区分に分けられる。この一覧は日本語教師養成に、グローバリゼーションに直面した社会にも対応できる内容を持たせようとする試みであった。が、それ以上に留意したいのは、この一覧が「画一的な『標準的な教育内容』ではなく、『基礎から応用に至る選択可能な教育内容』を示すことを基本とする」としている点である。「それぞれの日本語教育機関においては、そこに示された教育内容を基に、教育目的や学習者のレベ

ル等の属性に応じていろいろな組み合わせをし、教育課程が編成できるようにするものである。」(p.6)のである。

しかし、上記のシラバスが世に出てから約10年が経過したが、社会が突きつける課題と教師養成との落差はなかなか埋まらない。現状では「3領域・5区分」の図(別紙1)は浸透した。理念の理解は少し進んだ。既存の教師養成プログラムを持つ組織は、手持ちの講義をそれぞれ3領域、5区分に割り振って見せる形を多くとった。そして、見せ方に変化があることで、講座編成にも多少の影響があったことは見られるが、内実は“420時間”も“主専攻・副専攻”もほぼ生きている。社会の現実との落差はさらに増し、このままでは立ち行かなくなってきたのである。

1.3 第三のパラダイムシフト

2008年の留学生30万人計画の策定を受け、2009年には大学における国際化拠点の形成を文部科学省が支援する「国際化拠点整備事業(グローバル30)」が始まり、留学生受け入れに関する体制の整備などが始まった。2010年には新たな在留管理制度が可決・成立し、在留カードの交付など新たな在留管理制度の導入を始めとして、特別永住者証明書の交付、研修・技能実習制度の見直し、在留資格「留学」と「就学」の一本化が始まる。移民の受け入れ国としての日本の姿が公的に姿を現すことになる。無論、2008年秋に始まった世界的な金融危機に日本も巻き込まれており、留学生30万人計画にあてられる予算も削減対象となろう。しかし、人口が減少に転じた日本にとって、今後50年間で1千万人の移民を受け入れる外国人政策「日本型移民国家の構想」(坂中)をはじめとして、年少者も含めた外国人地域住民の受け入れシステムの整備は緊急の課題である。

2008年11月1日現在の国内における日本語教育の概要を見ると、実施機関・施設等数1,779に占める“一般”の施設・団体は1,182、日本語教師数30,959人中の“一般”の教師は25,732人、日本語学習者数166,631人中の“一般”の学習者数は121,321人と、それぞれ大きな割合を占めている。その“一般”の内訳であるが、(財)日本語教育振興協会認定施設が341(28.8%)と、いわゆる専門的な日本語学校が一番多いが、続いて、国際交流協会が283(23.9%)、任意団体が242(20.5%)、教育委員会が114(9.6%)、地方公共団体が71(6.0%)などと続く。全体として、地域住民である外国人に対する日本語学習支援が大きな割合を占める現状が見てとれる。

2008年11月1日現在、日本語教師の養成等を実施している国内の機関・施設等数は521で、うち“一般”の施設・団体が285(54.7%)と最も多く、以下大学が190(36.5%)、大学院が33(6.3%)、短期大学が13(2.5%)の順となっている。半数以上が「一般」で、その内訳は、国際交流協会が131(46.0%)と最も多く、以下(財)日本語教育振興協会認定施設が46(16.1%)、任意団体が33(11.6%)、地方公共団体が25(8.8%)などと続く。教師養成に占める“一般”の大きさを無視することはできない。

これは何を意味するのか。従来型の教育体験では対応しきれないような日本語学習支援が、往々にして不十分な養成を経ただけの地域ボランティアに負わされている日本の現状である。そのような中で教師養成に関しては2009年に、日本語教育能力検定試験 模擬試験実施・日本語教育能力検定試験出題に関するデータ収集、日本語教師養成・研修に関する課題整理などが始まった。しかし、拙論では、これとは異なる方向を提案したい。教師養成受講生を出発点として、今後の養成講座の方向性を考える試みである。

2. 学生の小レポートが示唆するもの

2.1 講義の構成と学生レポート

拙論では、日本語教師養成の入口に立ったばかりの大学生たちの小レポートを取りあげる。対象の大学生たちに対する日本語教育プログラムには20前後の講義が常時開講され、50単位の取得が可能となっている。日本語教育関係の講義を“主専攻”に匹敵するだけ受講し本格的教師を目指す学生もいれば、“副専攻”に匹敵する程度受講し将来的に何か役立てばと考える学生、専攻は異なるが日本語教育関係も2、3課目受講している学生などもある。彼らが受講中の「日本語教授法」は、週2回の計2コマ4単位の講義で、2年生以上に向けて開講されている。講義の内容であるが、通常の講義形態に加えて、多様な12のビデオ授業の一部視聴と検討、学生によるテキストの重要項目解説の5分間発表、教案の一部に基づいた7分間の模擬授業、実際の授業参加（大学の日本語授業、地域日本語教室、地域学習支援）の感想レポート、そして、受講中の感想メモと共に、締めくくりに1コマで書ける小レポートが課せられる。最後の小レポートであるが、先行文献などをじっくり読み込み、まとめるのではなく、自身の学習過程の振り返りをその場で行うような位置付けがされている。短時間で、直観的に書かれた小レポートを拙論の分析対象とする。

小レポートを書いた学生たちは、4年生が4人、3年生13人、2年生14人、中国人留学生2人の計33人である。小レポートのタイトルはやや重々しく、「日本語教員養成シラバスと自身の学習履歴・学習設計」と題されており、「自分がこれまで大学および他の場所（高校、アルバイト経験、日本語支援の場等）で学んできたことを、『日本語教員養成において必要とされる教育内容』（別紙1）の枠組みを使って分析する」ことが課された。学生たちは日本語教員養成シラバスのキーワードを見、そのうちのどのキーワードに匹敵する内容をどこで学んだと感じるかを記した。なお、回答は自由記述形式をとったため、分析可能な回答部分を含んだレポート数は33であった。（別紙2）以下、キーワードを挙げ、33回答中いくつかの回答に、どのような言及が見られたかを採りあげたい。

2.2 学生レポートのキーワード

何を学んだかの回答がかなり分散するのに対して、どこで学んだか、何が学びの契機となったと考えるかはいくつかのキーワードに集中する傾向があった。それらのキーワードにそって分析を進めた。なお、キーワードの抽出と統一は筆者が行い、第2判定者の確認を得た。また、学生の回答では、大学の講義に関して、「講義」「大学の講義」「授業」などの記述があるが、これらは「講義」に統一しても意味に変化がないと判断した。一方、小・中・高校などの授業は「授業」と統一した。

(1) 講義 18

大学の講義を学びの場として挙げた学生は18人にのぼり、言及者は最多となっている。ただ、「講義」といっても、体験的な活動（模擬授業、口頭発表、教材作成、テスト作成、教案作成、など）に言及している回答者が、半数の9人いることに留意したい。学生たちの描く「講義」はけっして一方的な知識授与型に限らず、講義中の体験的な部分からの学びも意識されている。

以下の回答は「講義」に関してもっとも多く項目を挙げた例であるが、そこでは「講義」の問題点にも言及している。

「音声研究・統語研究・語彙論・日本語教育・教材開発・言語習得法・言語教授法・言語教育学・

応用言語学・言語評価・異文化理解教育などを受講してきた。範囲は理論や異文化について多岐に渡るが、どうしても浅い。例えば統語についてある程度の知識はあるが、実際の教育の場で活かせるかと問われればそうではない。用語をちらほら知っている程度にとどまる。」(4年女子学生)そして、この学生は「今後は知識・理論の拡充が課題である」と感じており、そう思った要因は「クラスゲストやフィールドワークでの体験によるものが大きい」としている。

(2) 留学 16

日本語教師養成シラバスのキーワード例に該当する学びを留学体験から得たとするレポートは多い。以下のレポートでは留学からいかに多くのことを得たかが書かれ、行く前は自分の英語力を伸ばしたくて行ったようなものだが、「帰国してみると、英語力よりもずっと大切なものを得て帰ってきた自分の姿があった。言葉を学ぶということは、その土地の文化・習慣を通して異文化理解をするということなのだ」と結ばれる。

留学を挙げた16人中、特に、留学先の日本語教室助手の体験を挙げた学生が2人、留学時の交換教授を挙げた学生が2人いる。このほかに「海外旅行」のみを挙げた学生も一人いて、若い学生たちが国外での日本語非母語話者との直接接合から多くの学びを得ていると実感していることが見られる。

(3) クラスゲスト 9、チューター 3、ボランティア 5、フィールドワーク 2

これらはすべて教育/支援体験である。クラスゲストとは、日本語クラスに定期的に参加する日本人学生ボランティアを指す。クラスゲストには、毎回授業に出席すること、留学生在が希望した場合(あるいは、教師が必要だと判断した場合)学習サポートをすること、自身も教室というコミュニティの一員として活発なコミュニケーションをもつこと、授業の最後に「活動記録」を記入して提出することなどがよく課される。一方、チューターは、留学生の勉学を1対1の形でサポートする。さらに、大学外のボランティア教室で子供の学習支援を担当したりする学生ボランティアの場での学びを挙げた者が5人、このほかにフィールドワークのボランティア教室での日本語支援を挙げた者が2人、留学生の友人に日本語について聞かれた経験を挙げた者が2人いる。学生たちが多くの日本語支援の実践の場を得ていること、それが学びにつながっていると感じていることが見てとれる。

(4) アルバイト 5

アルバイト先での外国人との接合が学びの場となとした学生が2人、日本人との接合ではあるが接客業が教員シラバスの中の一部項目の学びの場となっているとした者が3人の計5人による言及がある。以下は後者のひとりである。「高校卒業後の春休みから始めたコーヒーショップでのアルバイトでは、定期的に『セルフチェック』と称した、自身の仕事内容の振り返りを自身で記入する紙を用いての面接がある。それによって昇給するかどうかが決まるのだが、それで自己点検能力が養われたのではないかと思う。」(2年女子学生)とし、「自己点検能力」を日本語教師養成において必要とされる教育内容のひとつとして挙げている。

(5) ビデオ授業の視聴 4、教室見学 1、外国語学習体験 5

これらは外国語学習/見学体験である。ビデオで日本語授業の実際を視聴し、一定の視点に従って分析したり、コメントをまとめたり、討議したりする活動が学びにつながると書いた学生が4人、外国

語学習体験を挙げた学生は留学生 2 人による「日本語授業」を含めて 5 人いる。視聴者であったり、見学者であったり、学習者であったりと役割は異なるが、目の前に展開される言語教育の実践から学びがあったと認識されていることがわかる。

(6) 小・中・高授業 5

小学校授業に関してはネイティブによる英語活動が挙げられ、中学校授業では国際理解授業における韓国人留学生の来訪が挙げられている。無論高校授業によって世界史を学んだという記述もあるが、以下は高校の英語授業についての記述である。

「高校生の時、英語の授業は 2 つあった。『オーラル』と『リーディング』である。しかし、その頃はなぜこの 2 つを分けなければならないのか、疑問であった。なぜなら 2 つとも内容が違えども、学習の進め方が同じで違いがよくわからなかったからだ。」(3 年女子学生) とし、これによって外国語学習の進め方への気づきを得たと記している。

(7) その他 5

その他、メディア、自学、部活を挙げた者、中学校時代の外国人生徒の様子を挙げた者、近隣の研修施設の外国人との接触を挙げた者がいる。

以上、「どこで、何を学んだか」について見た。小レポートには、学生たちの記憶に残る学びの形が、座学よりも体験を通して起こる傾向が強く出ている。

2.3 学生レポートに見られる構成主義的⁽²⁾ 学び

以上の小レポートから、学生たちが体験によって知識が身につくこと、また、知識獲得への動機が育つことを実感している傾向が読みとれる。「やってみる、振り返る、気づく、整理する、新たな計画を立てる」といった構成主義的なプロセスが多く読みとれるのである。学生たちはそれぞれの人生を生き、新しい知識を既有知識と結びつけて、真の習得を推進する個別的で、主体的な人々である。

それでは、小レポートから立ちのぼってくる構成主義的教育観は日本語教師研修に取り込まれているのだろうか。河野(2009)は「現在、養成講座や養成課程の授業で教えられているもののうち、教室で先生に教えてもらうのではなく、各自で学べるものも多いのではないか」(p. 212)と問題提起をし、「知識面については、書籍類や CD-ROM などのメディアを使用し、対面の授業では、そこでしかできないことに限定できるように整備できないだろうか。」(p. 213)と主張する。今回の小レポートからも、その主張が支持できる。

教師養成講座の姿勢は、学校教育同様、知識重視型と体験重視型の間で揺れ動くことも多い。さらに、留学等で体験的に理念が染みついた受講者が、基礎的知識を体系だてて学ぶ場が教師養成講座であるという「体験(動機づけ)⇒基礎知識」の、“教育能力検定試験準備講座型”をとるか、逆に「基礎知識⇒体験」(実習型)をとるかという姿勢の違いもある。問題は、多様性や姿勢の違いがあることではない。多くの養成講座が「420 時間」を掲げて、時間さえ満たせば専門性が確立され、日本語教師としての資格をそなえ、就職することが可能であるかのように主張することである。その一方で、「420 時間」という数字にはもはや根拠はないとする見方も浸透しつつあり、教師の専門性を見る上で、今後長時間の教師養成講座を修了したかよりも日本語教育能力検定試験合格の重みが増す傾向が出ることも考えられる。大規模なペーパーテストは理念がどうあろうとも制約も多い。知識重視になりがち

で、勢い、どの教師養成講座も試験対策的側面を強める可能性もある。だからこそ、私たちは構成主義的立場をいっそう重視すべきではないか。養成講座受講生がどこで学んだと実感するかを出発点に、教師養成講座を育てていく姿勢を重視したい。

<注>

1. オーディオ・リンガル法、直接法など個々の教授法理論については、青木ほか(2001)、鎌田ほか(1996)、細川(編)(2002)、日本語教育学会(編)(2005)などを参照していただきたい。
2. 構成主義的教育観と客観主義的教育観については久保田(2000)の解説がわかりやすい。その他、教育/学習理論については、岡崎ほか(2003)、西口(1999)、ワーチ(1995)、レイヴ&ウエンガー(1993)など多数ある。

<参考文献>

- 青木直子・尾崎明人・土岐哲(編)(2001)「教師の役割」『日本語教育学を学ぶひとのために』世界思想社
- 岡崎洋三・西口光一・山田泉(2003)『人間主義の日本語教育』凡人社
- 河野俊之(2009)「ー現在から未来へー『教師』の飛翔」『日本語教育の過去・現在・未来 第2巻 教師』凡人社
- 久保田賢一(2000)『構成主義パラダイムと学習環境デザイン』関西大学出版部
- 日本語教育学会(編)(2005)『新版日本語教育事典』大修館書店
- 坂中英徳(2009)『日本型移民国家の構想(増補版)』移民政策研究所
- 西口光一(1999)「状況的学習論と新しい日本語教育の実践」『日本語教育』100号 日本語教育学会
- レイヴ, J. & ウエンガー, E. (著) 佐伯胖(訳)(1993)『状況に埋め込まれた学習ー正統的周辺参加に』産業図書
- ワーチ, J. V. (著) 田島 信元・茂呂 雄二・佐藤 公治・上村 佳世子(訳)(1995)『心の声: 媒介された行為への社会文化的アプローチ』福村出版
- Richards, J. C. & Rodgers, T. S. (2001) *Approaches and Methods in Language Teaching. Second Edition*, Cambridge, Cambridge University Press
- 佐々木倫子(2006)「パラダイムシフト再考」『日本語教育の新たな文脈ー学習環境、接触場面、コミュニケーションの多様性ー』アルク
- 日本語教員の養成に関する調査研究協力者会議(2000)『日本語教育のための教員養成について』文化庁
- 日本語教育のための試験の改善に関する調査研究協力者会議(2001)『日本語教育のための試験の改善についてー日本語能力試験・日本語教育能力検定試験を中心として』文化庁
- 依光正哲(2003・5)「日本における外国人労働者問題の歴史的推移と今後の課題」『「在留特別許可」に関する事例研究』一橋大学大学院社会学研究科(一橋大学機関リポジトリ
http://hermes-ir.lib.hit-u.ac.jp/rs/bitstream/10086/14454/1/pie_dp150.pdf)

<参考 Web サイト> (2009年8月15日検索)

文部省(当時)「21世紀を展望した我が国の教育の在り方について」(中央教育審議会第二次答申(全文))

http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/12/chuuou/toushin/970606.htm#02

文化庁・平成 20 年度国内の日本語教育の概要

http://www.bunka.go.jp/kokugo_nihongo/jittaihou/h20/gaiyou.html

文化庁・文化審議会「日本語教員等の養成・研修に関する調査研究協力者会議について」

http://www.bunka.go.jp/bunkashingikai/kondankaitou/nihongo_kyouin/youkou.html

文化庁・日本語教員養成のための標準的な教育内容’

http://www.bunka.go.jp/file_1/1000011516_reference_5.pdf#search

別紙1 『日本語教育のための教員養成について』（文化庁）

日本語教育養成において必要とされる教育内容				
	領域	区分	内容	
コミュニケーション	社会・文化・地域に関わる領域	社会・文化・地域	世界と日本	歴史/文化/文明/社会/教育/哲学/国際関係/日本事情/日本文学……
			異文化接触	国際協力/文化交流/留学生政策/移民・難民政策/研修生受入政策/外国人児童生徒/帰国児童生徒/地域協力/精神衛生……
			日本語教育の歴史と現状	日本語教育史/言語政策/教員養成/学習者の多様化/教育哲学/学習者の推移/日本語試験/各国語試験/世界各地域の日本語教育事情/日本各地域の日本語教育事情……
		言語と社会	言語と社会の関係	ことばと文化/社会言語学/社会文化能力/言語接触/言語管理/言語政策/言語社会学/教育哲学/教育社会学/教育制度……
			言語使用と社会	言語変種/ジェンダー差・世代差/地域言語/待遇・ポライトネス/言語・非言語行動/コミュニケーション・ストラテジー/地域生活関連情報……
			異文化コミュニケーションと社会	異文化受容・適応/言語・文化相対主義/自文化（自民族）中心主義/アイデンティティ/多文化主義/異文化間トランス/言語イデオロギ-/言語選択……
	教育に関わる領域	言語と心理	言語理解の過程	言語理解/談話理解/予測・推測能力/記憶/視点/言語学習……
			言語習得・発達	幼児言語/習得過程（第一言語・第二言語）/中間言語/言語喪失/バイリンガリズム/学習過程/学習者タイプ/学習ストラテジー……
			異文化理解と心理	異文化間心理学/社会的スキル/集団主義/教育心理/日本語の学習・教育の情意的側面……
	言語と教育	言語教育法・実習	実践的知識/実践的能力/自己点検能力/カリキュラム/コースデザイン/教室活動/教授法/評価法/学習者情報/教育実習/教育環境/地域別・年齢別日本語教育法/教育情報/ニーズ分析/誤用分析/教材分析・開発……	
		異文化間教育・コミュニケーション教育	異文化間教育/多文化教育/国際・比較教育/国際理解教育/コミュニケーション教育/スピーチ・コミュニケーション/異文化コミュニケーション訓練/開発コミュニケーション/異文化マネジメント/異文化心理/教育心理/言語間対照/学習者の権利……	
	言語に関わる領域	言語	言語教育と情報	教材開発/教材選択/教育工学/システム工学/統計処理/メディア・リテラシー/情報リテラシー/マルチメディア……
			言語の構造一般	一般言語学/世界の諸言語/言語の種類/音声の種類/形態（語彙）の種類/統語の種類/意味論の種類/語用論の種類/音声と文法……
			日本語の構造	日本語の系統/日本語の構造/音韻体系/形態・語彙体系/文法体系/意味体系/語用論的規範/表記/日本語史……
			言語研究	理論言語学/応用言語学/情報学/社会言語学/心理言語学/認知言語学/言語地理学/対照言語学/計量言語学/歴史言語学/コミュニケーション学……
			コミュニケーション能力	受容・理解能力/表出能力/言語運用能力/談話構成能力/議論能力/社会文化能力/対人関係能力/異文化調整能力……

別紙2 「どこで、何を学んだか」

学年	学んだ項目	どこで学んだか
4	言語習得、言語と社会の関係、言語使用と社会、異文化コミュニケーション教育、言語教育と情報	アルバイト—スペイン系コミュニティ
4	教授法、評価法、年齢別教育方法 学習者の負担への配慮、モチベーション管理 異文化接触 日本語教育の歴史と現状 ウチ・ソト、人称代名詞、親族名称についての学習 ブラジル人労働者、難民支援 異文化コミュニケーション、異文化適応 学習者のストレス	講義 講義—テスト作成 講義 講義 講義 講義—ケーススタディー 留学、海外旅行 クラスゲスト
4	音声研究、統語研究、語彙論、日本語教育、教材開発、言語習得法、言語教授法、言語教育学、応用言語学、言語評価、異文化理解教育(用語をちらほら知っている程) 異文化理解教育 「置いた」と「置いておく」の違い ネイティブが持つ語感、言葉の使いわけへの気づき 日本語教授法	講義 クラスゲスト・フィールドワーク フィールドワーク 外国語学習体験 講義—先生の実体験、教案作成、発表準備
4	教育制度、出入国管理、外国人就労、共生社会、宗教観 行政の取り組み、年少者教育 不法滞在者、ビザ等の知識	講義 ボランティア メディア
3	自身の文化・歴史を知ること 異文化接触—食文化 日本語の構造 コミュニケーション能力	留学—交換教授 留学 クラスゲスト 講義—模擬授業
3	異文化接触 日本の伝統的な文化・外国で流行の日本文化への気づき アイデンティティの問題 言語習得、言語と社会の関係、 日本語の系統、音韻体系、方言、待遇表現 日本語教授法 日本語教授の難しさ 無理して教えないこと	留学 留学 留学 講義 講義 ビデオ授業視聴 クラスゲスト チューター
3	日本語教授法、誤用訂正 教科書分析、教材開発、教材選択、 異文化コミュニケーション、言語イデオロギー 外国人児童生徒／地域協力／移民・難民政策 日本語の文法質問に答えることの難しさ	講義 講義—教科書分析 ボランティア教室見学 友人の留学生
3	異文化接触、異文化受容・適応 文化の違い 伝統文化、日本語についての気づき 異文化コミュニケーション 説明のしかた、誤用訂正、中間言語、指導の仕方 ブラジル人の生徒同士で行動・ポルトガル語を話している姿 新しい教授法	留学 留学生の日本語学習支援 留学生との交流 講義 クラスゲスト、チューター 中学校時代 講義
3	コミュニケーション、異文化間摩擦、非言語コミュニケーション、異文化間コミュニケーション 異文化理解	講義—交換教授、異文化間コミュニケーション 中学校授業—「国際理解」授業の韓国人留学生来訪
3	社会的マナーや日本人としてのアイデンティティを養うこと	留学—日本語教室助手
3	生徒の日本語に対する考え方 親の教育方針の違い	ビデオ授業の視聴
3	言語学習 言語と社会、母語を教えるのは難しい 発音の違い、助詞の違いへの気づき 言語と心理	留学—交換教授 クラスゲスト クラスゲスト 留学
3	異文化との接触、異文化理解の難しさ、自文化中心主義、社会言語能力	留学
3	イスラム教や中国に対する偏見・先入観を捨てること、受容・理解能力 意見を言うことの大切さ、先生の教育技術	留学 留学—留学時授業

3	外国語学習の進め方への気づき 聞く、話すの能力の必要性 指導法、副教材の有効利用	高校授業 アルバイト-外国人客接客 ビデオ授業の視聴
3	異文化理解 日本語の質問に答えることの難しさ 第2言語が日本語である子の国語としての日本語に対する否定的態度 年少者教育	近隣の研修施設 留学 フィールドワーカー-小学校訪問 ビデオ授業の視聴
3	アイデンティティ 異文化理解への気づき 日本語と英語の音声 接続詞や助詞の使い方の不自然さ	留学-高校時代 留学 講義 学習支援ボランティア
2	世界史、政治・経済 異文化接触 異文化間心理学、 日本語の構造-文字・表記、 言語研究-論文作成法 言語習得への気づき	高校授業 留学 講義 講義 講義 英語検定試験受験
2	日本語教育学 プレゼンテーション 交流 日本語学習動機 異文化コミュニケーション	講義 講義-口頭表現 留学生ボランティア 留学 クラスゲスト、チューター
2	日本語教授法 異文化コミュニケーション、言語	講義 留学
2	異文化受容、適応 日本語史 日本語の構造と文法体系、音韻体系、形態・語彙体系、表記、学習ストラテジー、 聞いたことのなかった教授法、評価法、教室活動 自己点検能力	小学校授業-ネイティブによる英語活動 高校授業-テーマ学習 講義 講義 アルバイト-自身の仕事内容の振り返りを 自身で記入
2	日本語の教え方、日本語教育の歴史、現状 日本語教授法、 Popカルチャーへの興味	講義 講義-模擬授業、教案作成 留学-日本語教室助手
2	日本語・自国についての知識への気づき 日本の文化・日本語・言語習得への気づき	講義 留学
2	コミュニケーション能力、対応力 助詞の違いへの気づき	ボランティア 留学
2	相互理解 異文化コミュニケーション、異文化受容・適応、日本語力・教師としての学力不足	クラスゲスト 海外旅行
2	カリキュラム作成の重要性 日本語文法・漢字のアンバランス	クラスゲスト ボランティア
2	日本語教育史、言語習得・学習ストラテジー、教授法、日本語の構造 日本史、世界史	講義 高校授業
2	実践的知識・能力 実践力、相互評価の良さ	アルバイト 講義-発表、模擬授業
2	日本の文化、礼儀 コミュニケーション能力 集団とは何かを理解すること 日本文学 幼児への接し方	部活 アルバイト-接客業 部活 自学-読書好き 自学-子ども好き
2	言語の構造一般、日本語の構造、言語教育法 マルチメディア教材制作	講義 講義-教材制作
2	日本の社会、歴史に関する教育への気づき 国際関係、他国の宗教	留学 留学
留	直接法、教室内活動、教室外活動、教授法	日本語授業
留	折衷法の言語教授法	日本語授業